

文脈に埋め込まれた学習をどう支援するか？－希釈飲料(「カルピス」)作りを通じたコミュニケーション発達支援プログラム開発の試み－

企画者	長崎 勤	(実践女子大学生生活科学部)
司会者	吉井勘人	(山梨大学大学院総合研究部教育学域)
話題提供者	小谷 恵井	(アサヒグループホールディングス(株)コアテクノロジー研究所)
	長崎 勤	(実践女子大学生生活科学部)
	小島拓也	(習志野市立袖ヶ浦西小学校)
	仲野みこ	(筑波大学附属大塚特別支援学校)
指定討論者	田島信元井	(白百合女子大学人間総合学部)

KEY WORDS: 埋め込まれた学習 希釈飲料 コミュニケーション

【企画趣旨】

障害児では、他者の意図を理解し相互作用をすること、また意図を共有した協同活動(co-operative activity)が困難で、社会的活動を制限することになるといわれている。2016年には障害者差別解消法が施行され、社会参加を支える合理的配慮が求められている。そのため、日本の文化や地域性に基づいた家庭・保育・教室などの生活の中でのコミュニケーション・社会性をアセスメントし、支援する方法の開発が急がれている。

田島ら(2014)は、幼児の親子による3回の希釈飲料(商品名は「カルピス」など)作りの過程を分析し、子どもが徐々に大人の好む濃さや量に応じて自分の行動を調整し、大人に対して希釈飲料を作れるようになる発達プロセスを観察している。この入門的調理活動ともいえる親子による希釈飲料作りは、他者意図理解・協同活動、また自己調整活動の発達課題が総合的に「文脈に埋め込まれた活動(Lave and Wenger,1991)」であるといえよう。

一方、①幼児のASDでは、他者のための希釈飲料を作るのが困難、②中学生のASDでは、他者に好みの希釈飲料を尋ねることが困難、などの様子(長崎,2016)が示され、発達初期から生活の中で、楽しんで、他者意図理解・協同活動を支援することは、発達障害児の社会的活動の場を広げ、就労にも結びつくものと考えられる。

そこで、本シンポジウムでは、「カルピス作り」という文脈の中に埋め込まれたコミュニケーションの学習をどう支援するかについて基礎的なディスカッションをしたい。

【話題提供者の趣旨】

●「親子での『カルピス』作製・飲用体験におけるやりとりと子ども・親の発達への影響」小谷恵井(アサヒグループホールディングス(株)コアテクノロジー研究所)

「カルピス」を親子で一緒に作って飲む体験において生起する親子のやりとりが、子どもと親の発達に及ぼす影響について、家庭での3回の体験の観察調査(3歳～小5の子と親)、WEBでの質問紙調査(4歳～小2の子と親)、介入調査(4歳～小2の子と親)の3つの調査により検討した。その結果、短期的な3回の変化として親のサポートを受けながら、次第に自分で考えながら作れるようになるといった子どもの自立的变化が促されること、中～長期的には、作製・飲用体験での親の支援的関わり、子どもの成長が、子どもの認知・社会性の発達、ならびに、親の子どもへの応答性、子育て肯定感、親子間の信頼感へ良い影響をもたらすことが示唆された。

●「『カルピス』作りにはどんな学習が埋め込まれているのか？－『カルピス』作りを通じたコミュニケーション発達支援プ

プログラムの構想 長崎 勤(実践女子大学)

発達障害児の社会参加を支えるための合理的配慮として、他者の意図理解や人と協力して何かを行う協同活動の支援が求められている。そこで①希釈飲料を他者によってもらい自分でも作る、②他者によってあげて楽しむ、③他者の好みに関心を持ち、④他者の好みを尋ねて好みに合わせて濃さや量を調整する、⑤小集団で役割を互いに決めて希釈飲料づくりを楽しむ、という5つのLevelを設定し、乳幼児期から中高生の発達障害児を対象に各Levelでの他者意図理解と協同活動をアセスメントしそれに基づいて支援する「パッケージ・プログラム」の構想について紹介したい。

●「通級指導における『カルピス』作りを通じたコミュニケーション支援」小島 拓也(習志野市立袖ヶ浦西小学校)

通級指導を受けている児童は、他者との関わりに対する課題(協力すること・適切な伝達をすること・気持ちを考えて行動すること・折り合いをつけること、など)がある。そこで、小学校で通級指導を受けている児童を対象に、「みんなで楽しい活動をする」「相手にわかるように尋ねる」「相手の好みを聞いて作る」ことを目的とした希釈飲料作りを行い、ゲストに希釈飲料を振る舞う場面(お楽しみ会)を設定した。本話題提供では、お楽しみ会での実践を報告し、「ゲストに好みの希釈飲料を尋ねることができているか」「他の子どもが希釈飲料を作っている様子に注目しているか」などに着目し、支援の有効性について検討する。また、小学校の通級指導で希釈飲料づくりを行う場合、どのようなことを目的とした指導・支援が考えられるか検討したい。

●「発達に遅れのある幼児への社会性とコミュニケーションを育む『カルピス作り』の実践」仲野 みこ(筑波大学附属大塚特別支援学校)

本実践は、特別支援学校幼稚部の3～5歳の幼児を対象とした社会性とコミュニケーションを促進することを目的とした『カルピス作り』の集団活動である。初回の活動では、母子での『カルピス作り』の活動を行い、2回目以降の活動では、教師や友達と『カルピス作り』を行った。今回の「カルピス作り」には「自分が飲みたい味を選んで作ること」から、「他者に飲みたい味を選んでもらい、それを作ってあげること」までのさまざまな社会的認知とコミュニケーションの発達課題が含まれていること、さらに、「子ども自身が作ったものを他者と味わい共有すること」は、社会性とコミュニケーションの基盤となる愛着と信頼関係を同時に育むものであることが示唆された。(NAGASAKI Tsutomu, YOSHI Sadahito, KOTANI Megumi, KOJIMA Takuya, NAKANO Miko, TAJIMA Shingen)本シンポは科研費・基盤研究Cによる補助を受けて行われた。